

音楽評

大阪フィルハーモニー交響楽団定期演奏会 楽章描き分けた 雄弁な弱音

井上道義の首席指揮者就任とともに、大阪フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会が、11年ぶりに大阪・中之島のフェスティバルホールへ帰ってきた。しかも、約2500席の会場で毎回2日間の開催となる。建て替え後1年を経たホールにとっても大きな看板だ。新シーズン開始となった第477回定期演奏会の2日目を聴いた。(4月5日・フェスティバルホール)。

メインに選ばれたのは、井上が強い思い入れを持つショスタコービチの交響曲で、最も編成が大きい「交響曲第4番」。なかなか演奏の機会がない作品だが、井上と大阪フィルは、14年前に猛然とした演奏を聴かせている。作曲当初は内容が前衛的とされ、当時のソビエト連邦でお蔵入りになったという作品だ。今聴いても破天荒な音楽で、凄まじい暴力性にあふれている。

しかし、今回耳に残ったのは、弱音の雄弁さだった。こ



大阪フィル定期演奏会に登場した井上道義。フェスティバルホール、飯島隆撮影

のホールの響きは特徴的で、全体は柔らかなのに、個々の楽器の音は驚くほど明瞭に聴こえてくる。音が空気の中に溶け込む様子が目に見えるようだ。どれも消え入るように終わる三つの楽章が明確に描き分けられた。最後に混沌の中から浮かび上がったのは、かすかな、それでいて力を持った救いの響きだ。

前半に演奏されたのが、神尾真由子をソリストに迎えたチャイコフスキー「バイオリン協奏曲」。歌い口は相当濃厚なのに、なめらかな印象を

受けたのは、彼女の成熟と言って良いだろう。

井上と大阪フィルは36年にわたって共演を続けてきた旧知の間柄だ。ただし、身内になって初めてわかることもある。互いに探り合う場面もあった。常に音楽と格闘する姿を正直にさらけ出してきた井上だからこそ、このコンビのこれからを聴いてみたい。

4月末に、井上が咽頭がんの治療に専念するため、活動を休止すると発表があった。快癒を切に祈るほかない。

(小味淵彦之・音楽評論家)